

親の認識する幼児の発達資産形成の現状：質問紙調査の結果の傾向と測定尺度の課題の検討

菅原，航平
佐賀女子短期大学

<https://doi.org/10.15017/2556596>

出版情報：生活体験学習研究. 18, pp.25-32, 2018-07-30. 日本生活体験学習学会
バージョン：
権利関係：

親の認識する幼児の発達資産形成の現状

— 質問紙調査の結果の傾向と測定尺度の課題の検討 —

菅原 航平*

Parent Awareness of the Status of Infant Developmental Asset Formation: Results of a Questionnaire Survey and Issues with the Current Measurement Scale

Sugahara Kohei*

要旨 本研究では、幼児を育てる保護者1,113名に対して、「発達資産 (Developmental Assets)」に関する認識や日常生活の状況についての質問紙調査を実施し、「発達資産」についての認識と、日常生活や生活体験学習との関連の検討を行った。結果から、保護者は「発達資産」を重要だと考えており、発達資産と多様な活動の場に関する認識に関連がみられた。また、「発達資産」に関する認識で園の分類を行ったところ、生活体験学習に取り組む園が一つのクラスターとなり、「発達資産」と生活体験学習の関連が示唆された。生活体験群内では、起床就床時刻など生活リズムと、園で教えられている・いたこと等に有意な差がみられたが、教育意識や多くの日常生活状況で同様の認識であった。これらのことから、発達資産が生活体験を豊かに生み出す基盤となり、また、生活体験学習が発達資産形成と関連している可能性が示唆された。さらに、生活体験学習に力を入れている園が様々な側面で共通の傾向を示したことから、園の取り組みが保護者の認識に影響を与えていると考えられる。

キーワード 幼児、親の子育て意識、発達資産、生活体験学習、幼児教育・保育

1. はじめに

本稿で着目する「発達資産 (Developmental Assets)」は、これまで本研究グループが注目してきた生活体験を豊かに生み出すための基盤となる環境や内面の資源をさす概念である。「発達資産 (Developmental Assets)」は、子どもの育ちに寄与する諸条件・要素を可視的に捉えようと試みた理論であり、子どもの育ちと生活体験の関連を問う新たな観点となりうる。研究グループでは、幼稚園・保育所が幼児や親の「発達資産 (Developmental Assets)」形成を支える重要な地域資源であると捉え、生活体験学習はそれを支える方法としての可能性を有しているのではないかと仮説を設定して研

究を進めてきた。なお、これまでの研究成果については、永田ら (2017)¹⁾等を参照して頂きたい。

「発達資産 (Developmental Assets)」は、生活体験を豊かに生み出すための基盤となる環境や内面の資源を指し、若年層の支援のための研究と実践を展開することを目的に設立されたアメリカの非営利組織 Search Institute の研究を Benson (2003) らが体系化した概念²⁾である。「外的資産 (external assets)」(資料1-1)としての容認と支援(母親以外の家族が子育てに積極的にかかわるなど)、エンパワーメント(役割)(子どもや子育てに関して、地域社会の理解や関心が高いなど)、規範と期待(子どもが家庭の中でのルールを、きちんと守ることができるな

*佐賀女子短期大学 こども未来学科
連絡先: 〒840-8550 佐賀市本庄町大字本庄1313番地
TEL 0952-23-5145 (代表) E-mail: k-sugahara@asahigakuen.ac.jp

ど)、多様な活動の場(子どもが、自分で工作をしたり、好きな絵を描く機会が十分にあるなど)の4因子20項目と、「内的資産(internal assets)」(資料1-2)としての好ましい価値観(子どもが、困っている人を助けたり、人のために何かをすることができるなど)、好ましい自己確立(子どもが、自分の目標に向かって努力をしたり、何かを我慢することができるなど)、社会的能力(子どもが、自分で計画を立てて、物事を進めることができるなど)、学習への傾倒(子どもが、何かを達成するために、意欲をもって取り組むことができるなど)の4因子20項目からなる概念である。

本研究ではまず保護者の「発達資産(Developmental Assets)」に関する認識についての全体像を把握するとともに、その関連性の整理を行い、その後、園ごとの保護者の認識の特性について検討を行う。あわせて、この園の特性(保護者の「発達資産(Developmental Assets)」に関する認識の傾向)ごとに幼児の日常生活状況や親の関わりについても分析を行い、園の特性と生活や関わり方の関連についての検討を行う。これらを通して生活体験と発達資産の関連性の検討などを行うことを目的とする。

2. 方法

本調査は、対象を幼稚園・保育所・こども園に就園する3歳児以上の幼児の保護者に設定し、2016年2月1日～3月31日の期間において実施した。

なお、倫理的配慮として研究グループが選定した幼稚園・保育所等に調査の目的・方法について事前説明を行い、了承が得られた園を対象として設定した。調査の匿名性の確保等の倫理的配慮ならびに個人情報保護の観点から、各園には保護者から回収した封筒は未開封のまま研究グループに送付することを事前に説明し、了解を得た上で、質問紙に回答結

果を統計的に処理することで園ならびに個人を特定されることがないように配慮するとともに研究目的以外に利用しない旨を明記した。

調査の方法としては、予め質問紙1部を封入した封筒を配布し、園を通じて対象の保護者に配布・回収を行った。なお、同園にきょうだい児が在園している場合は、年長のきょうだい児を調査対象とした。その旨についても各園ならびに保護者に対して事前に文書等での説明の上、実施した。

設問項目としては、①幼児・回答者の基本情報、②幼児の日常生活と基本的生活習慣、③家庭と幼稚園・保育所における教育的役割、④保護者の子どもに対する教育観、⑤保護者の子育てにおける発達資産に関する認識、⑥保護者の日常生活・基本的生活習慣の6項目全80問から構成した。

調査対象者数は、全体で1,113名を対象に実施し、そのうち回収された有効回答数は863部(有効回答率77.5%)であった。園別の対象者ならびに有効回答率は、表1の通りである。

分析については、因子間の相関係数についてはピアソンの相関係数を用い分析を行った。調査データと「発達資産」の8因子の適合については、外的資産・内的資産についてそれぞれ、尤度法・プロマックス回転での因子分析を行い、項目については因子負荷量.50以上、因子についてはクロンバックのアルファ係数.70以上を基準として検討を行った。園ごとの保護者の「発達資産」に関する認識の傾向による園のグループ化については、「発達資産」の8因子について、それぞれの園の平均点を算出し、ウォード法を用いたクラスター分析により分類を行った。分類後の比較については、量的データについては分散分析、質的データについては順序尺度についてはクラスカルウォリス検定、名義尺度については χ^2 検定を用いた。

表1 調査対象と有効回答数・率

調査対象	種別	対象児				有効回答数	有効回答率
		合計	3歳児	4歳児	5歳児		
幼稚園・こども園	4	590	174	215	201	477	80.8%
保育所	7	523	172	172	179	386	73.8%
調査対象合計	11	1113	346	387	380	863	77.5%

表2 全体の傾向

外的資産 (external assets)		内的資産 (internal assets)	
家族のかかわり	75%	人のために行動する	63%
家族以外の手伝い	49%	注意する	48%
子どもへの注意	65%	自分の気持ちを話す	85%
相談や支援	60%	責任をもってやり遂げる	72%
親の地域参加	23%	健康的な生活をする	81%
地域社会の理解	47%	みんなと協力する	76%
子どもの地域参加	33%	努力や我慢する	75%
子どものボランティア活動	27%	自分のことを認める	86%
安心して遊ぶ環境	82%	役に立てる人間になりたい	49%
家庭でのルールを守る	72%	夢をもつ	72%
社会規範を守る	87%	計画を立てて進める	59%
大人が見本となる	76%	意見を伝達・理解する	71%
子ども同士で遊ぶ機会	66%	苦手なことも行う	49%
年齢に応じた発育	48%	平和的に解決する	54%
工作や絵を描く機会	59%	他人を尊重する	61%
外での新しい経験	59%	話の内容を判別する	54%
生き物と触れ合う経験	65%	意欲をもって取り組む	71%
仕事を手伝う機会	50%	好奇心や意欲をもつ	77%
自分で物を買う	24%	自分の力で取り組む	66%
体を動かす経験	60%	読書が楽しい	72%

3. 結果

(1) 全体的な傾向

保護者の子育てにおける「発達資産」に関する認識を尋ねた40項目についての調査結果を8類型（外的資産：「容認と支援」、「エンパワーメント（役割）」、「規範と期待」、「多様な活動の場」、内的資産：「好ましい価値観」、「好ましい自己確立」、「社会的能力」、「学習への傾倒」）の区分から、その結果を表2に示す。

保護者の意識として「とても重要である」との認識が高い「発達資産」の項目は、「外的資産」では「規範と期待」の「家庭外の規範」（87.4%）、「エンパワーメント（役割）」の「安全・安心な環境」（82.2%）の2項目であった。「内的資産」では「好ましい自己確立」の「自己肯定」（85.5%）、「好ましい価値観」の「誠実さ」（85.5%）と「健全な日常生活」（80.6%）の3項目であった。一方、「とても重要である」との認識が低い項目は、「外的資産」では「容認と支援」の「保護者の地域活動への協力」（22.6%）、「多様な活動の場」の「消費活動」（23.9%）、「エンパワーメント（役割）」の「奉仕活動（ボランティア活動）」（27.3%）と「子どもの社会的役割」（32.9%）、「地域社会の承認」（46.9%）の5項目であった。また、多くの項目で天井効果がみられた。

類型毎の回答傾向（表3）で見ると、外的資産が全体的に低く特に「役割」等は低くなっていた。

表3 類型ごとの回答傾向

外的資産 (external assets)		内的資産 (internal assets)					
容認	87.4%	規範	92.0%	価値	92.6%	社会	89.2%
役割	85.2%	活動	87.2%	自己	92.6%	学習	93.0%

因子間の相関を表4に示す。外的資産「規範と期待」、「多様な活動の場」の2つの因子で内的資産との相関が $r \geq .40$ となっていた。

表4 因子間の相関

	価値	自己	社会	学習
容認	.37	.33	.31	.32
役割	.37	.38	.33	.34
規範	.55	.52	.52	.51
活動	.56	.52	.51	.54

因子分析の結果については、外的資産3因子、内的資産2因子となっており、外的資産は、「地域因子」、「活動因子」、「規範因子」に整理された。「地域因子」は、容認と支援、エンパワーメント（役割）に分類される項目から、「活動因子」は多様な活動の場に分類される項目、「規範因子」は規範と期待に分類される項目で構成されていた。内的資産では、「社

会的スキル因子」は、好ましい自己確立、社会的能力、学習への傾倒に分類される項目から、「社会情動的スキル因子」は好ましい価値観、好ましい自己確立に分類される項目で構成されていた。

(2) 園ごとの傾向

クラスター分析の結果、4群に分類されたが、うち1群は1園のみの群であったため、1園のみの群はその後の分析対象から除外した。

群はそれぞれ、A群は保育所4園（3歳以上児在園児数：51名、103名、60名、56名）、B群は幼稚園1園、保育所1園、認定こども園1園（3歳以上児在園児数：197名、199名、58名）、C群は幼稚園1園、保育所2園（3歳以上児在園児数：156名、114名、81名）であり、種別、園児数に有意差は認められなかった。

各群の特徴としてA群は、他群と比較すると、「学習への傾倒」(F(2,797)=5.74, p=.003)の評価が低いことが特徴であった。なお、この群の4園は全て保育方針・内容として、生活体験学習を重視して取り組んでいる園であり、他の群には生活体験学習に取り組む園がなかったため、生活体験群(A群)とした。なお、生活体験に取り組んでいるとの判断基準は、保育方針や内容として、明確に体験活動を重視していることを打ち出しており、観察などでそれが確認できること、園の関係者が生活体験学習学会の会員であることとした。B群は、他群と比較すると、特に評価が高い因子、低い因子はなく、平均的

な値を示していることが特徴であったため、バランス群(B群)とした。C群は、他群と比較すると、全体的に「発達資産(Developmental Assets)」を重視しており、特に、「好ましい自己確立」(F(2,797)=3.56, p=.029)、「社会的能力」(F(2,797)=4.13, p=.016)の評価が高いことが特徴であったため、「発達資産」重視群(C群)とした。

各群の日常生活等との関連では、生活体験群は、生活習慣などについて、園で教えられているという意識が強く(F(2,835)=5.31, p=.005)生活習慣等16項目のうち園で教えられていると考えているのは、A群9.6項目、B群8.5項目、C群9項目となっていた。子どもの就床時刻は、午後10時以降に就床する者がA群16.4%、B群11.8%、C群8.5%となっており、もっとも遅かった($\chi^2(2)=8.93, p=.012$)。バランス群は、子どもの起床時刻がもっとも遅かった($\chi^2(2)=21.86, p<.001$)。「発達資産」重視群は、メディア利用が少なかった($\chi^2(2)=7.17, p=.028$)。

生活体験群の4園を比較して、1%水準で有意差がみられた項目を図1に示す。園で教えられていたことでは、箸・椀の持ち方、歯磨き、手洗い、うがい、言葉づかい、手伝い、礼儀の7項目で有意な差がみられた(図1)。

例えば、箸・椀の持ち方では、A園37.2%、B園83.1%、C園85.1%、D園50.9%と教えられているという意識に大きな差がみられた。

日常生活では、子どもの平日の起床時刻(図2)、朝食の時刻、回答者(保護者)の就床時刻、起床時

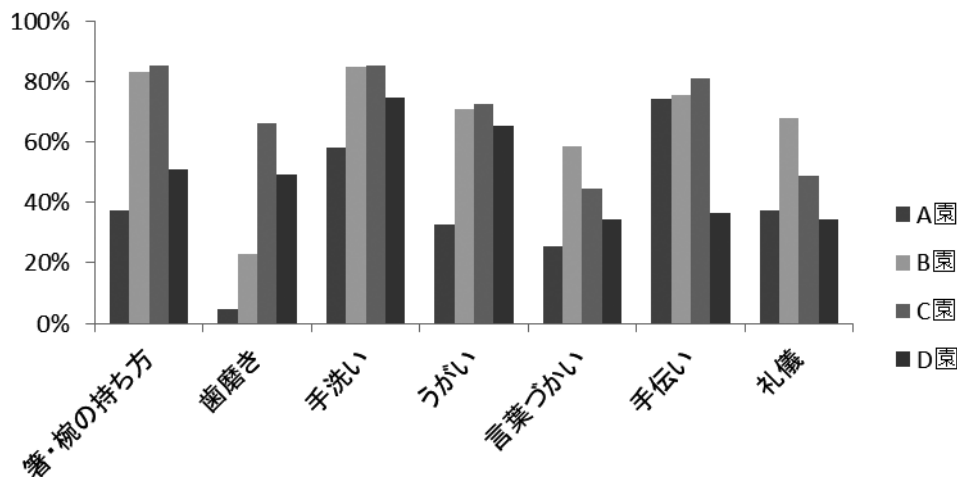


図1 園で教えられている・いたこと

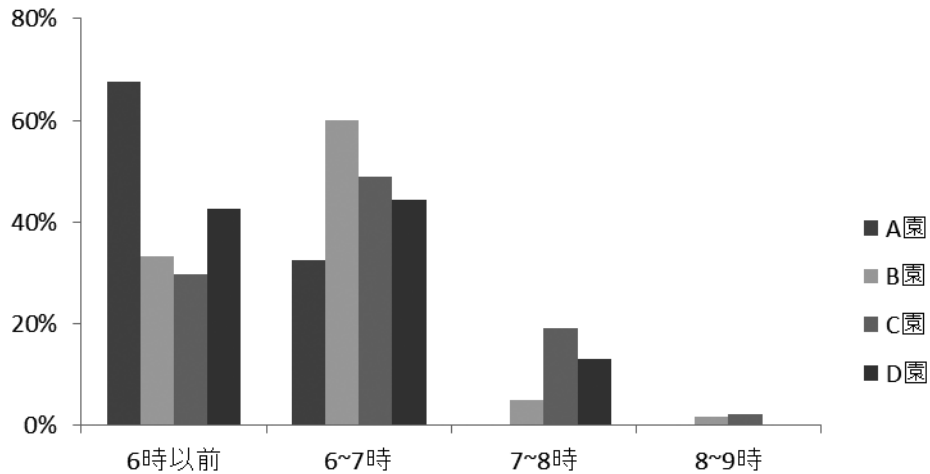


図2 子どもの平日の起床時刻

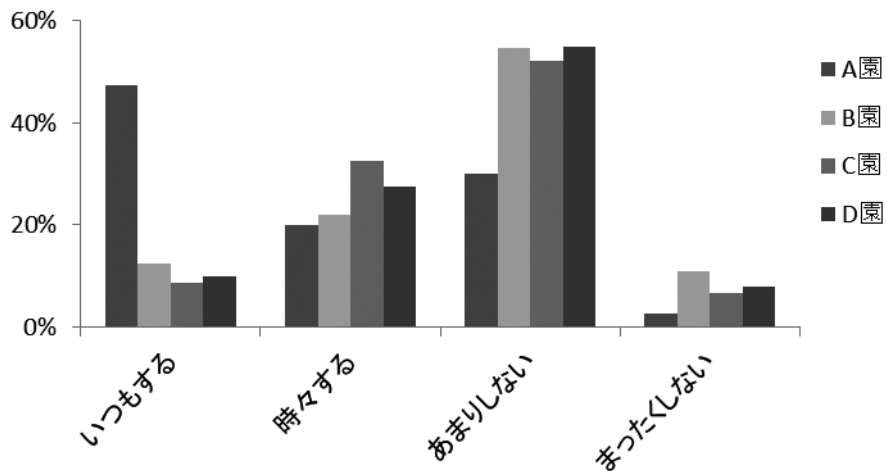


図3 文字や数の学習のような遊び

刻、朝食の時刻、携帯ゲーム機や知育玩具を使って文字や数を学習するような遊びをする（図3）という項目に有意な差がみられた。

4. 考察

(1) 全体の傾向

全体の傾向としては、発達資産の重要性について多くの項目で天井効果がみられるなど保護者は発達資産をとっても重要であると認識していたが、特に内的資産を重視しているようであった。

因子間の相関では、「規範と期待」、「多様な活動の場」が内的資産との関連がみられ、周囲の規範意識が高いことや多様な活動の場が確保されていることが、子どもの内的資産の形成と関連しているという

保護者の意識が窺われる。

因子分析の結果からは、想定されていた発達資産のモデルは、今回の調査結果には当てはまらないようであった。これは、今回は実際の形成状況ではなく保護者の認識を質問していることや、多くの項目で天井効果がみられたことも影響していると考えられ慎重な解釈が必要だと考えられる。

直接的な比較を行うことのできる研究はないが、類似の研究との比較では、対象者の年齢が異なり、また、実際の形成を測定しているという違いはあるが相原らの研究³⁾と比較すると、重要との認識の方が形成よりも高く評価されており、重要だと評価はされているが十分に資産が形成されているわけではないと考えられる。また、今回の調査では、内的資

産の方が重要との認識が強かったが、相原らの研究の実際の形成状況では、外的資産と比較して内的資産の方が形成が進んでいなかった。このことから、単純に重要との意識が高ければ高いほど形成状況の評価が高まるわけではなく、例えば、重要だと評価しているからこと実際には形成されていても形成状況について厳しく評価することや、内的資産の形成が外的資産の形成よりも困難であることなどの可能性が考えられる。比較からは、今回の認識と形成の差異や関連性についてより詳細な検討が必要であると考えられる。

(2) 園ごとの傾向

「発達資産」に関する認識についての群ごとの結果は、幼稚園・保育所といった園種別、園児数などの影響は認められなかった。このため、認識の差異は園の種別や規模などではなく、生活体験学習を重視する保育方針・内容等の園から影響と、保護者の意識や生活実態等家庭からの影響の相互作用が認識の差異に一定の影響を及ぼしていると考えられる。全体の傾向でも触れたが、今回の調査では発達資産の形成までは言及できないが、幼稚園・保育所等が「発達資産」に関する意識に影響を与える、地域資源のひとつであることが確認されたと考える。

また、生活体験学習を重視する園が、一つの群(クラスター)にまとまったということは、生活体験学習と「発達資産」には何らかの関連性があることが示唆される。例えば、生活体験学習を重視する園の保護者は、「学習への傾倒」に関する重要性の認識が低かったが、「学習への傾倒」は、「宿題や課題への挑戦」、「読書の喜び」など比較的体験的な側面が強い項目であったためと考えられる。

日常生活などで見ると、生活体験群の園の保護者は、園で様々なことを教えられていると評価していたが、就床時刻が最も遅い等生活習慣に課題もみられた。生活体験学習が保育に取り入れられることで、保護者は園で充実した指導を受けていると捉えていたが、就床時刻が遅い等必ずしも良好な生活習慣を獲得しているとはいえない面もある。生活体験群が、「発達資産」に関する重要性を必ずしも高く評価していない可能性として考えられる要因は、例えば、保護者の重要性の認識が低いからこそ、園が課

題意識をもち、生活体験学習に力を入れているという可能性や、園の「発達資産」が豊かなため、存在することが当然と考えており、保護者が重要性に気づいていない、独立変数の検討が十分ないため未知の変数が影響を与えているという可能性等が考えられる。

体験群内では教育意識や多くの日常生活状況で同様の認識・状況であったが、起床就床時刻など生活リズム、園で教えられている・いたこと、文字や数の学習のような遊びに有意な差がみられており、体験活動への取り組みだけでなく、地域性なども影響を与えていると考えられた。

園の特性としては、「内的資産」について、保護者の重要と認識する要素が異なる傾向を示すということに現れており、保護者と園の相互作用で「このような子に育てて欲しいという姿」が園ごとに異なり、それはいくつかのパターンを示していたと考えられる。

(3) まとめ

保護者は発達資産を重要だと捉えており、特に「内的資産」について重要だと評価していた。関連では、「外的資産」の「規範と期待」、「多様な活動の場」と「内的資産」の関連が強く、保護者は、内的資産を育てるためには、これらの環境が重要であると考えているようである。非営利組織 Search Institute がこれらの項目を設定したのも健全な発達に重要な項目を選択しているためであり、ある程度の相関が現れるのは当然の結果ともいえる。生活体験学習との関連では、まず「多様な活動の場」といった生活体験学習が重視しているものが、内的資産との相関が強く、形成においても関連している可能性が示された。これは、認識の調査であるので実際の効果には言及できないが、少なくとも保護者は「内的資産」を形成するためには、様々な体験活動が必要であると認識しているようであった。

園ごとと特徴としても、生活体験学習に取り組む園は、一つのクラスターとなっており、園での生活体験学習への取り組みが保護者の発達資産に対する認識にも何らかの影響を与えていることが示唆された。ただし、生活体験群の中でも有意な差が認められる項目も認められた。このことから、生活体験学

習に取り組んでいるという園でも、園に通う子供たちや保護者の背景や、園の生活体験学習に関する認識などによって効果が異なると考えられた。今後、園における生活体験学習のうち特にどのような活動が、どのようなプロセスにおいて保護者の発達資産に関する認識や発達資産の形成、生活習慣などに影響を与えているのか、より詳細に検討が求められる。

また、今回の調査の限界として、調査で質問しているのは、「発達資産」に関する意識であり、実際の程度形成されているかを問うていないものではない。このため、形成の状況については明らかにならず、今後、今回の結果を手掛かりとしながら、形成の現状やそのプロセスについての調査を行う必要がある。くわえて、園での具体的な生活体験学習についての取り組み状況などに関する設問もないため、これも合わせて調査を実施することで、「発達資産」と生活体験学習の関係をより精緻に検討してい

くことが可能になると考える。これらの検討を通して、幼稚園・保育所などでの生活体験学習のより効果的な実践に向けての知見の蓄積をすすめていきたい。

本研究は科研費研究（基盤C—一般）「子どもと親の学びを生み出す発達資産としての生活体験を育む「地域家庭教育支援」（課題番号：15K04309）の一環として実施したものである。

引用参考文献

- 1) 永田誠・大村綾・菅原航平（2017）生活体験学習研究17号 pp. 1-13.
- 2) R.M. Lerner・P.L. Benson（2003）「Developmental assets and asset-building communities: Implications for Research, Policy, and Practice」
- 3) 相原次男、ウィルソン・エイミー、岩野雅子（2010）「日本の子どもの発達資産に関する研究—発達資産プロフィール調査の分析を中心に—」山口県立大学紀要3号 pp. 1-6.

資料1-1 外的資産（external assets）

類型	項目	質問文
容認と支援	家族の支援	(1) 母親以外の家族が子育てに積極的にかかわる
	他の大人の援助	(2) 困っている時には、家族以外の大人が子育てを手伝ってくれる
	子どものことを気にかけてくれる地域社会	(3) 近所の大人や地域が、子どもが悪いことや危険なことをしている時に注意してくれる
	親身に気遣う学校	(4) 学校や幼稚園・保育所が、子育ての相談や支援に積極的である
	保護者の地域活動への協力	(5) 子育て中の親が、地域の活動・行事に参加する機会がある
エンパワーメント (役割)	地域社会の承認	(6) 子どもや子育てに関して、地域社会の理解や関心が高い
	子どもの社会的役割	(7) 子どもにも、地域の活動・行事に参加する機会がある
	奉仕活動（ボランティア活動）	(8) 子どもにも、ボランティア活動などに参加する機会がある
	安全・安心な環境	(9) 子どもが安心して遊ぶことができる環境が整えられている
規範と期待	家庭の規範	(10) 子どもが家庭の中でのルールを、きちんと守ることができる
	家庭外の規範	(11) 子どもが社会でやってはいけないことや守らなければならないことを、きちんと守ることができる
	大人の模範としての役割	(12) 大人は、子どもの見本となるような言動を行う
	仲間との交流 年齢にふさわしい発達への期待	(13) 年齢の近い子ども同士で、一緒に遊ぶ機会が十分にある (14) 子どもが、年齢に応じた進度で発育を遂げる
多様な活動の場	創造活動	(15) 子どもが、自分で工作をしたり、好きな絵を描く機会が十分にある
	家庭外活動	(16) 子どもにとって、家の外で新しいことを経験する機会が十分にある
	自然や生命とのふれあい	(17) 子どもが、草花や虫・動物といった生き物と触れ合えたり、育てたりする経験が十分にある
	職業との出会い	(18) 子どもが、大人が働いている姿を見たり、仕事を手伝う機会がある
	消費活動	(19) 子どもが、自分でお金を払って物を買ったりする機会がある
	健康活動	(20) 子どもが、健康のために外で体を動かしたり、スポーツをする経験ができる

資料1-2 内的資産 (internal assets)

類型	項目	質問文
好ましい価値観	思いやり	(21) 子どもが、困っている人を助けたり、人のために何かをすることができる
	社会的正義感	(22) 子どもが、ルールを守ったり、悪いことをしている人を注意することができる
	誠実さ	(23) 子どもが、正直に謝ったり、素直に自分の気持ちを話したりすることができる
	責任感	(24) 子どもが、自分の役割を責任もってやり遂げることができる
	健全な日常生活	(25) 子どもが、規則正しく、健康的な生活をするすることができる
	所属感	(26) 子どもが、集団の中でみんなと協力して過ごすことができる
好ましい自己確立	自己統制力	(27) 子どもが、自分の目標に向かって努力をしたり、何かを我慢することができる
	自己肯定	(28) 子ども自身が、自分のことを大切な存在として認めることができる
	人生の目的	(29) 子どもが、将来、人の役に立てる人間になりたいと思う
	将来への希望	(30) 子どもが、将来、なりたいことややりたいことなどの夢をもつことができる
社会的能力	計画性と決断力	(31) 子どもが、自分で計画を立てて、物事を進めることができる
	コミュニケーション能力	(32) 子どもが、人に自分の意見を伝えたり、他人の意見を理解することができる
	抵抗力	(33) 子どもが、やりたくないことや苦手なことも、きちんと行うことができる
	争いの平和的解決	(34) 子どもが、他人と対立した時に、平和的に解決することができる
	人権の理解	(35) 子どもが、他人の個性や考えを尊重することができる
	自己情報を管理する力	(36) 子どもが、伝えるべきことと話してはいけないことを、きちんと判別することができる
学習への傾倒	達成への動機づけ	(37) 子どもが、何かを達成するために、意欲をもって取り組むことができる
	学びへの意欲	(38) 子どもが、学ぶことに対して、好奇心や意欲をもつことができる
	宿題や課題への挑戦	(39) 子どもが、宿題や課題について、自分の力で取り組むことができる
	読書の喜び	(40) 子どもが、本を読むことを楽しいと感じることができる